



県北地域の玄関口として地域の活力の循環を図る

那珂市企画部長
渡邊 莊一氏

筑波銀行那珂支店長
荒川 誠

那珂市長
先崎 光氏

那珂市副市長
玉川 明氏

筑波銀行は地域金融機関として、地域の皆さまとのつながりを深めるべく取り組んでいます。「支店長のわがまち紹介」は、筑波銀行の支店長が所在エリアの市町村をご紹介させていただくコーナーです。今回は茨城県那珂市です。筑波銀行那珂支店長 荒川 誠が那珂市長 先崎 光氏にお話を伺いました。

総合計画の推進

2023年2月から2期目の市政運営を行っています。私が市長に就任した2019年は国体直後に令和元年東日本台風で被災し、復興に取り組むなか、2020年にコロナ禍が始まりました。その後3年以上、産業・コミュニティ・福祉・教育、あらゆる面での厳しい制約のなかで、一丸となって対策に没頭してきました。そうした中でも足を止めることなくまいってきた種を、2期目では大きく育てて花を咲かせたいと考えています。

2023年度からスタートした「第2次那珂市総合計画後期基本計画」では、住みよさに加え、にぎわい、活力であふれる市を目指して「住みよさプラス活力あふれるまち」をまちづくりの目標に掲げています。この総合計画を市民と共有し、実現に向けた協働を推進するため、職員の発案で市報に概要版を掲載しました。

地域コミュニティの活性化

2024年度のオープンを目指し、第四中学校区にコミュニティセンターを建設中です。センターは

中学校区ごとに設置する計画で、すでに第一中学校・第二中学校・第三中学校・瓜連中学校区には設置が完了しており、第四中学校区が最後となります。校区内の菅谷地区は本市の人口5万3千人のうち2万2千人が暮らしているため、ほかの4つのセンターよりも規模を大きくし、また、防災倉庫の設置を含め、災害時の避難所機能も整備します。

建物は行政がつくれますが、それに魂を入れる、地域活動を活発化するのは住民の皆様です。そこで本市では、コミュニティ活動をリードする人材を育成するために「協働のまちづくり推進フォーラム」「まちづくり人材育成カリキュラム」などを開催しています。様々な方に参加していただき、今後の自治活動の進展を期待しています。

農業後継者の育成と新しい農業の進展

本市の基幹産業は農業です。ただ、少子高齢化の影響で後継者が減少し続け、最近では資材や燃料の高騰も加わり、非常に厳しい環境になってきています。

そこで、農業の担い手の確保や育成を図るため、農業者と行政が協働で「那珂市農業担い手確保・育成協議会MIRAI」を立ち上げました。協議会では、新

規就農者や就農希望者が直面する農地や住居の確保、農業機械の入手など、あらゆる課題に関する相談に対応するとともに、経験やノウハウを惜みなく伝えていくことで、就農と定着を支援しています。この協議会は市内農業者の提案で設立したのですが、市町村単位でのこのような取り組みは県内初です。

また、従来の慣習を飛び越えた新しい「スマート農業」も進めます。例えば、ドローンを使って水田に種もみを直接まく「ドローン^{ちよくは}直播」の実証実験が今年4月に実施され、実用化を目指しています。ドローンに搭載した種もみは、水田の底に届くように鉄粉を混ぜたコーティングを施しています。一番の強みは省力化で、直播にかかる時間は田植え機の4分の1程度で、種もみを苗に育てる約1か月の成育時間と労力を削減することができます。

移住・定住促進「いい那珂オフィス」

2021年4月、那珂市商工会に「いい那珂オフィス」がオープンしました。サテライトオフィス、コワーキングスペース、「いい那珂^{移住ラボ}IJU-Labo」を備え、地域おこし協力隊や企業支援コーディネーターが創業支援や移住・定住のサポートを実施しています。

地縁・血縁があり本市に戻ってくるUターン・Jターン者の支援が中心ですが、Iターン者を支援し定住につながった実績もできました。その成果の1つは、他県から移住してきた女性2人が2021年10月にオープンしたカフェ「ふ^わ輪り」です。本市で生産された野菜を活用したメニューを提供しているのが特長で、すでに人気店になって地域に定着しています。

地域おこし協力隊

地域おこし協力隊は過疎地の市町村で効果を発揮するイメージがありますが、本市の現状をつぶさに見て、地域活性化には外部人材の力も必要だと思い至り、2020年度から導入しました。現在は4人の隊員が活動しています。

私が本当に感心したのは、まず、アグリビジネス活性化プロジェクト担当の入江さんがアグリビジネス組織「フェルミエ那珂」と取り組んだ「ドライブスルーいい那珂マルシェ」です。「フェルミエ那珂」では、生産した野菜を毎月1回マルシェで販売していたのですが、それをコロナ禍でも続けるために、ドライブスルー方式を取り入れたのです。野菜などの商品を箱詰めし、車への積み込みを販売員が行う



ことで、接触を減らすことができます。野菜を届けたい生産者と、巣ごもりの時間を新鮮な野菜を食べて有意義に過ごしたい消費者の思いが合致して人気を博し、メディアにも取り上げられました。

次に、パークビジネス活性化プロジェクト担当の八子さんが考案した「あおぞらクローゼット」は、子どもが大きくなって着られなくなった服をおさがりとして次の子どもたちにつなげるもので、静峰ふるさと公園でこれまで5回開催しています。毎回2,000着以上の服が集まり、それらをサイズや種類に分けて無償で配布するのですが、開始約1時間でほとんどなくなるほど盛況で、暮らしのなかの「捨てる」を減らすイベントとして定着しました。ほかにもナイトシネマを開催し、静峰ふるさと公園での人々の交流を促進しています。

また、コミュニティマネージャー育成プロジェクト担当の支倉さんは、いい那珂オフィスを拠点に、次代を担う人材の育成や、課題を解決するためのアイデアが集まるコミュニティづくりを目指す活動をしています。小商い=少ない元手で行う商売を始めたい人を対象に「小商い寺小屋」の開講や、前述のカフェ「ふ輪り」など創業の支援を行っています。

新規就農プロジェクト担当の兵藤さんと松田さんは、就農に向けて市内の農業法人で園芸作物の栽培技術および農業経営の基礎知識を習得中です。同時に、自身の活動を広く発信し、本市へ新規就農希望者を呼び込む活動もしています。

産業振興と観光振興

道の駅

道の駅は本市にとって特に大きなプロジェクトで、2028年度の開業を目指しています。道の駅はすでに県内外に多数設置されているので、先進事例の良いところを学び、地域になくしてはならない施設にしたいと考えています。場所はアクセスに優れた那珂IC近接にする予定です。

訪れた人に本市のおいしい農畜産物や菓子類など色々な特産品を味わい、買ってもらって、本市

の産業活性化を目指します。また、いつ来ても遊べる屋根付きの全天候型の子どもの遊び場を設置するなど、子育て支援にもつなげます。

本市は常磐自動車道那珂IC、国道118号・349号、JR水郡線と県北地域へのアクセスが良く、県北地域への玄関口といわれています。そこで、道の駅に県北地域のインフォメーションセンターの機能を持たせたいと考えています。

さらに、防災拠点としての機能も持たせます。防災倉庫や蓄電設備等の設置により地域防災機能を充実させます。また、常磐自動車道を輸送インフラとみなし、広域的な防災拠点となるよう、災害支援関係者・派遣車両を支援する拠点としての機能を整備します。

本市にとって、那珂IC周辺の開発は30年来の悲願であり、道の駅周辺への民間企業の立地を推進するためにサウンディング調査を実施中です。

那珂市うまいもん会議

道の駅には、各地の道の駅を訪ね、目も舌も肥えた人が来ると予想されるので、本当に良いものでないと生き残れないという緊張感もあります。

そこで、道の駅の目玉商品^{トレヴィイ}とすることを視野に、「那珂市うまいもん会議TREV」で農畜産物の加工品開発を進めています。目指すのは、見ただけで本市がイメージできるような商品です。例えば笠間市は、「笠間といえば栗」と商品イメージが定着しています。本市も同じように、那珂といえば、と即答できるような商品を開発します。

本市のブランドとしてPRしている特産品には、「那珂かぼちゃ」「ひまわりオイル」「ほしいも」などがありますが、なかでもほしいもを道の駅の看板商品にしたいと考えています。それは、本市はひたちなか市・東海村と並んで「ほしいもの元祖」であると自負しているからです。現在、さつまいもの品種改良や乾燥機の性能向上により全国各地でほしいもが生産されるようになり、「ほしいもブーム」が起きていますが、他の地域のほしいもには負けない、元祖にふさわしい商品を開発しようと皆で意気込んでいます。



Half Century Ibaraki

茨城北部幹線道路と新インターチェンジ

本市に隣接するひたちなか市と東海村にまたがる常陸那珂港周辺は、様々な企業が集積し、人やモノが活発に行き交い、活力にあふれています。この活力は常磐自動車道や北関東自動車道、国道6号線を動線として流れるため、県北地域の内陸部には届きにくいという現状があります。そこで、茨城北部幹線道路を整備し、常磐自動車道那珂ICと東海スマートICの間に新しいICをつくり、茨城北部幹線道路と常磐自動車道とをそのICで接続することで、県北地域へ発展の原動力となる人やモノの流れ＝活力を引き込みたいと考えています。

引き込むだけでなく、県北内陸部から常陸那珂港方面に向かう人の流れも生まれます。例えば、大子町から常陸那珂港周辺への移動時間は40分ほどに短縮される見込みで、通勤圏の広がりや買い物等の利便性が高まることで、県北内陸部の人口減少を食い止めることにも寄与できます。

現在、これらの整備を国や茨城県に要請しており、実現すれば、結節点である本市の利便性は向上し、さらに住みよく活力のあるまちとなることが期待できます。

サイクリングコース

ブームとなっているサイクリングには本市も注目しています。道の駅を拠点として、車で訪れるサイクリング客を呼び込むことで、交流人口増加が見込めます。

毎年秋にいばらきサイクリング協会が主催する「Half Century Ibaraki」は、本市や常陸大宮市などが舞台の80kmのコースで、なかLuckyFM公園が発着点です。また、「奥久慈里山ヒルクライムルート」は、奥久慈の大自然を走る全長200kmに及ぶルートで、その中の市町村おすすりめコースには本市を通るコースがあります。ほかにもコースがあり、私も市長就任後にサイクリングを始め、大会に出場して盛り上げています。

筑波銀行に期待すること

筑波銀行は地域に密着している金融機関であり、本市は融資を受けたり、役員や支店長に審議会の委員として参加してもらったりと色々な点で関わりがあります。銀行の持つノウハウを本市の発展のために提供してもらっていることに感謝しています。今後もこのような良い関係を続けていきたいと思っています。

(取材日：2023年5月8日)



わがまちの特産品

—那珂市—

このコーナーでは、「支店長のわがまち紹介」で取材させていただいた市町村の施策や事業、取り組みなどを紹介しています。



いい那珂 いいもの

Iinaka Iimono

那珂市では、産業の振興と元気で活力のあるまちづくりのため、「那珂市特産品ブランド認証制度」を推進しています。市の農産物や市内の素材を使って製造・加工された32商品が認証されています。

いいもの探訪

人と風土がつくりだす
自然の美味しさ

市長インタビュで登場した「ほしいも」は那珂市を代表する特産品で、現在3つの商品が認証されています。

そのうちのひとつ、黄金色に輝く美しい色と柔らかな食感の「干し芋べにはるか」は、有機肥料で土を育てることから始まります。収穫後は、蒸した芋を冷風で2日間乾燥し、さらに2日間天日干しに。しっかりと太陽に当てないと水分は抜けきらず、あの黄金色と甘さにならないと話す生産者。惚れ込んだ旨さを求め、手間を惜しみません。

このほか、甘さに優れ、透き通るべっ甲色に輝くものを厳選した「EPISODE XIII」、希少品種の「泉」を原料にした「クロサツ本舗のやわらか干しいも黄金泉」も大好評です。



那珂市の美味しいもの、ほかにもたくさんあります。詳しくはwebサイトをご覧ください。

